



## 巻頭言

### 理事長・院長あいさつ

医療法人社団英明会 大西脳神経外科病院  
理事長・院長 大西宏之

2023年4月1日、医療法人社団英明会大西脳神経外科病院、理事長・院長に就任致しましたのでご挨拶申し上げます。当院は2000年12月に開院し、2020年12月に20周年を迎え、そして今年で23年目に突入致します。しかし、近年のコロナ禍によって少し全体的な雰囲気が停滞気味などところがあるように感じていました。コロナが明けつつある今、新しい気持ちで次の時代へ進もうという思いもあり、この度世代交代することになりました。

この20年で当院は東播磨地区において脳神経外科分野における急性期医療の確立を目指し、皆様に支えられながら、おかげさまで全国的にも脳神経外科の急性期であれば「大西脳神経外科病院」と知っていただけるまで成長することができました。最初の10年では、この東播磨地区の脳卒中医療の基礎を築き、今の脳神経救急体制を確立しました。脳卒中患者の情報を救急隊と共有する脳卒中プレホスピタルレコードを全国的にも先駆けて導入し、また今では当たり前になっていますが、脳外科専用のMRIを複数台導入し、24時間365日、MRIが常時撮影できるようにしました。それによって脳卒中の診断能力が格段に向上し、治療成績が向上しています。そして次の10年では、常に最先端の脳神経外科医療を導入し、全国的に見ても先駆けて最先端医療を展開する脳神経外科専門病院として認知されるようになりました。具体的にはマルチモダリティを駆使した脳神経外科手術や脳血管内治療などの低侵襲治療への方向転換、機能外科領域における集束超音波治療などです。この開院からの20年は大西英之 会長を中心に常に走り続け攻めた20年であったように思います。何もないゼロからのスタートで、このように全国的な規模にまで成長できたことは、会長の強いリーダーシップもさることながら、ともに走っていただいたドクター、職員の皆様がいたからこそでもあります。その多大なるご厚情に、心より感謝を申し上げます。

さて、このように20年を迎えましたが、当然ながらこれで「終わり」ではありません。これから先、新しい時代に向けて医療法人として、そして脳神経外科専門病院として我々はさらに成長しなければなりません。当院が今後何を目標に成長し、そしてこの東播磨地区の皆様にとどのように貢献していくのか、その方向性について考えてみたいと思います。これから先の展望についてはこれまでの「攻め」

の姿勢に加え、徹底した「守り」の姿勢と原点回帰が重要と考え、次の3つの取り組みを柱として掲げさせて頂きました。

- ①「医療安全、危機管理対策」
- ②「職員個々の人間力の育成と、責任感を持って自立したチームづくり」
- ③「最先端の医療レベルの向上、及び IT, AI などの最新技術の導入」

今までの当院はどちらかというとなんて脳神経疾患の急性期医療の確立と、最新医療技術の向上を目指して、三つ目に掲げている「最先端の医療レベルの向上」という方針のもとに進んで参りました。今後は、これまでの当院の方針を引き継ぎながら「医療安全、危機管理対策」、そして「人間力の育成、自立したチームづくり」といったものにも注力して参ります。開院20周年を迎えた2020年12月、コロナ禍真っ只中の折に、当院は初めて院内クラスターを経験し、病棟閉鎖という未曾有の事態を経験しました。まるで開院20周年を迎え浮き足立っている当院への戒めとも思えるようなタイミングでありました。職員一丸で未知なるウイルスと対峙する中で、当時、医療安全部長を務めておりましたが、この時改めて不測の事態にも揺るがない盤石な守りの経営地盤が必要であると痛感しました。未だ出口の見えないコロナ禍は、まさに予測不可能な出来事の象徴です。今後もこういった不測の事態というのは当然起こりうることを考えられます。これまでの医療安全、感染対策だけでなく、自然災害や不祥事、最近ではコンピュータウィルスなど、「医療行為を脅かすあらゆる不測事態が、今後も起こり得る」という認識を持って、気持ちを新たにしていかななくてはならないと強く感じております。地域の健康を第一に守る医療施設が、機能停止となる事態は決して避けなければなりません。そこで徹底した危機管理、安全対策を、一つの柱として取り上げさせて頂きました。次に、二つ目として掲げている「職員個々の人間力を育成と、責任感を持って自立したチームづくり」についてですが、この方針は、医療の原点はやはり「人との関わりである」という基本に立ち返った考えによるものであります。医療というのは患者さんとの関わりの中で、お互いの信頼関係がなければより良い医療を行うことができません。しかし、近年のこのコロナ禍によって、マスク越しでの会話であったり、特に院内行事がことごとく中止となっている影響もあってか、職員同士の人間関係の希薄化、チームとしての統一感が低下しているように感じています。また、入院患者さんにおいても面会が制限されたりと不安感も募ることが多いためか、ちょっとしたことでトラブルになることが増えています。今やいくらITやAIなどの最新技術の時代とはいえ、やはり病院というのは最終的には職員の人間力がものをいうところだと思っています。患者家族との信頼関係をきちっと構築し、「患者さんを、まさに自分の家族と思って親身になって対応する」という思いを常に持っていきたいと思います。これを機に原点回帰、職員個々の人間力を向上させ、責任を持ち、自立して行動ができるチームづくりをして参ります。最後の三つ目は、「最先端医療の向上」を挙げておりますが、これは当院が今まで取り組んできた姿勢を崩すことなく、踏襲してやっていきたいと思っております。今後はIT, AI, ロボットといった時代になりま

すのでそういった最新技術をどんどん導入し、より良い医療を展開していきたいと思います。当院はこの 20 年で本当に様々なことが起こり、新たな課題が生まれました。この様々な環境の変化とともに歩んだ経験を活かし、この 3 つの柱を今後は徹底して参ります。これまでの攻めの姿勢に加え、柔軟な「守り」を意識していくことをこれからの強みとして、東播磨地域の皆様にさらに安心してご利用いただける病院となることを目指していきたいと思います。

続きまして法人全体としての取り組みですが、近年、脳卒中診療において、地域における急性期医療の集約化や急性期診療だけでなく、回復期医療や慢性期の在宅医療などの重要性も再認識されるようになりました。脳卒中急性期診療のセンター化構想は、脳卒中学会を中心に現在進行形ではありますが、当院は脳卒中学会が定める一次脳卒中センターコア施設に昨年認定されることになりました。この東播磨地区においても今まで以上に脳卒中患者の集約化が進むことが予想されます。またこのコア施設認定を受けるにあたり、脳卒中相談窓口の設置も義務化されました。この脳卒中相談窓口というのは、急性期治療を終えた患者さんが、回復期、在宅医療へとスムーズに移行できるように相談支援を行う窓口になります。脳卒中は死因の第 4 位、寝たきり原因の第 1 位という背景もあり、2018 年 12 月に脳卒中对策基本法が策定され、その五カ年計画の中でも、多職種からなる専門チームによって急性期から生活期まで一貫した患者支援を行うことを施策として挙げられています。つまり急性期医療だけでなく、慢性期、維持期など包括的な医療が求められる時代へと移り変わってきています。これまでの当院は、急性期医療の確立に特化してまいりましたが、こうした時代の流れを受け、今後は回復期医療、在宅期医療にも注力していかなければなりません。そして最終的な目標として、脳卒中の予防から急性期治療、回復期、在宅医療までを当法人が包括的に管理し、この東播磨地域住民の健康管理、寝たきりにならないための健康増進を、脳神経疾患を通じて還元していくことを当法人の将来展望としたいと思います。

コロナウィルス感染症の影響は大きく、予断が許されない状況が続いています。そうした中、最大限の注意を払いながら、さらに新しい取り組み、事業展開をしていかななくてはなりません。コロナ禍真っ只中では部署によっては残業など、職員の皆さんに大きな負担が生じていることを、病院側としては重々理解しています。当法人は医療の根幹を支えていただいているスタッフの気持ちに配慮ししっかり応えることができるよう準備を整えて参ります。これからも様々な環境の変化が訪れてくることだろうと思います。しかし、どのような変化が起きようとも、職員一同が一丸となり、変化し続ける状況に柔軟に対応しながら、次の時代に突き進んで参りますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

